

東京都交響楽団の将来像に関する有識者懇談会

第6回議事録

令和元年11月25日（月）14時00分～

東京文化会館 中会議室2

【堤座長】 定刻となりましたので、始めさせていただきます。

委員の皆様におかれましては、大変お忙しい中をご出席を賜りまして、まことにありがとうございます。

定刻になりましたので、第6回東京都交響楽団の将来像に関する有識者懇談会を開催いたします。

まずは、事務局から定足数及び会議の公開に関する確認をお願いいたします。

【小野事務局長】 事務局長の小野でございます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

着座にて、失礼させていただきます。

それでは、まず、定足数の確認でございます。「東京都交響楽団の将来像に関する有識者懇談会設置要綱」第4条第2項におきまして、懇談会の会議は委員の過半数の出席を要してございます。

本懇談会の委員数は10名、現在8名のご出席をいただいておりますので、懇談会は成立していることをご報告させていただきます。

なお、石田委員、それから、片山委員につきましては、所用につき、ご欠席とのご連絡を頂戴してございます。

次に、会議の公開についての確認でございます。本懇談会は、設置要綱第6条により、公開で行うものとされており、資料及び議事概要につきましても原則公開となっておりますが、懇談会の決定によりまして、非公開とすることもできることになってございます。

先日実施いたしました楽員のヒアリングは忌憚のない意見を聞くために非公開で実施したものでございまして、また、報告書の素案につきましても、作成過程の資料ということになりますので、楽員ヒアリングの資料と報告書（素案）、こちらは非公開、その他は公開ということにさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

（異議なし）

【小野事務局長】 ありがとうございます。それでは、資料の取り扱いはそのようにさせていただいた上で、本日の会議は公開とさせていただきたいと思います。

以上でございます。

【堤座長】 どうもありがとうございました。

傍聴の皆様におかれましては、お配りいたしました懇談会の傍聴に当たっての注意事項のとおり、ご協力をお願いいたします。

それでは、議事に入ります前に配付資料について、事務局から確認をお願いいたします。

【小野事務局長】 お手元にお配りしている資料でございます。

会議次第等の下になりますが、まず、楽員へのヒアリング実施概要、それから、東京都交響楽団の将来像に関する有識者懇談会報告書（素案）、その下に当楽団の2020年度楽季プログラムプレスリリース、それからチラシ、その下にTOKYO MET SaLaAD MUSIC FESTIVAL 2019 [サラダ音楽祭]の実施報告、こちらが本日の配付資料でございます。お手元の資料をご確認いただきまして、不足等があれば、お申し出いただきたいと思います。よろしいでしょうか。

また、基礎資料集、こちらのファイルの中には、前回第5回東京都交響楽団の将来像に関する有識者懇談会の議事録を追加してございます。

それでは、少しお時間を頂戴いたしまして、当楽団の2020年度楽季のラインナップにつきまして、当楽団の芸術主幹の国塩から、またサラダ音楽祭の2019、こちらの実施報告につきましては、その後、ゼネラル・マネジャーの小川から、それぞれ説明をさせていただきます。よろしくをお願いいたします。

【国塩芸術主幹】 芸術主幹の国塩です。どうもいつもお世話になっています。座って失礼いたします。

お手元に、都響の2020年度楽季プログラムというパンフレットがありますので、ご覧ください。すべてをご説明する時間がないので、幾つかのみご紹介させていただきます。

2020年度は、都響の創立55周年であり、また戦後75年、それからベートーヴェンの生誕250年に当たり、そして何よりも、東京オリンピック、パラリンピックが開催される年ということもあり、「セレブレーション2020」というシーズンテーマを設けました。とりたてて何か一つだけ大きなイベントをやるということではなくて、年間のプログラムを通して、さきほど申し上げたような記念をあちこちにちりばめてつくったつも

りです。

まず、4月3日のシーズン幕あけの定期は、第900回の定期に当たりまして、音楽監督の大野和士が、なかなか演奏する機会のない大きな規模の曲である、メンデルスゾーン第2番の交響曲を中心としたプログラムを演奏します。前半のシューマンのピアノ協奏曲のソロの藤田さんも含めて、歌手、全て大野がみずから起用した比較的若い世代のアーティストたちばかりで、未来に向けての希望も含めてという意味合いを持たせております。

次に、4月20日と21日に登場するクラウス・マケラは、今23歳ですが、来シーズンからオスロ・フィルの音楽監督を務めることが決まっている注目の指揮者です。

2018年5月に都響を指揮して日本デビューをしたのですが、センセーショナルな成功をおさめまして、ぜひまた都響に来てほしいと熱望し、どんどん多忙になる中、早い時期の再共演が実現しました。

5月8日は、三善晃さんご自身が晩年「反戦三部作」と呼んでほしいとおっしゃったという、「レクイエム」「詩篇」「響紋」を一度に、山田和樹さんの指揮で演奏します。

この3作品がまとめて演奏されるのは1985年以來のことです。オーケストラ自身が行う演奏会としてはかなりチャレンジングな内容ですけれども、日本のオーケストラとしてこうした作品を紹介するのは大事な役目ではないかと思ひ、戦後75年という機会に取り上げることにいたしました。

そして、これはオリンピック開会直前、7月20日の定期演奏会Aシリーズでは大野和士が新しい作品を中心に指揮します。まず、都響がBBC響とエルプフィルとともにイギリスの作曲家ターネジに共同委嘱をした「タイム・フライズ」という曲が世界初演されます。これは三つの楽章からなる予定で、その第3楽章は、ターネジ自身が、東京、しかもオリンピックが開かれる東京という街を意識して作品を書くという構想を語っています。

藤倉さんの三味線協奏曲は、来年5月に名古屋フィルが日本初演しますが、つづけて都響も取り上げ、現代日本の新作を発信したいと思っています。

オリンピック・パラリンピックの期間ということでは、7月30日と31日の定期で、ギルバートがモーツァルトの三大交響曲を指揮します。ギルバートは今年都響でモーツァルトの「プラハ」を指揮したのですが、それが大変すばらしく、手応えを感じて、ぜひこの三大交響曲を都響とこの期間にやりたいと。世界中から多くの方が東京に来る時期ですので、誰もが知っている、言わば人類共通の音楽遺産であるモーツァルトの最高傑作を3曲一度に演奏するというのは、大きな意味があると考えております。

そして、9月16日、これはベートーヴェンの交響曲全曲演奏シリーズの一環でもありますが、矢部達哉がコンサートマスターに就任して30年の節目にも当たりますので、それを記念した演奏会です。矢部はソリストの一人としてベートーヴェンの「三重協奏曲」を演奏した後、演奏会後半の「エロイカ」でもコンサートマスターを務めることになっております。

翌月は、小泉が、オネゲルの交響曲第3番という、やはり第2次世界大戦に関係があって、非常に濃密かつ深遠な曲を、この節目の年に、ブラームスの3番とともに取り上げます。演奏時間は短いんですけど、非常に内容の濃い演奏会になるであろうと期待しております。

12月は、2018年まで首席客演指揮者を務めてくれたフルシャが、久しぶりに都響の指揮台に帰ってきてくれて、彼が得意な作品、都響としかできないプログラムをここで披露してくれることになっております。

1月はエリアフ・インバルが、ショスタコーヴィチの交響曲第13番を指揮します。インバルはこのところショスタコーヴィチを連続して取り上げてきておりますが、その一つの集大成的な意味を持つと考えています。

そして、シーズンのハイライトとして、セレブレーションという意味で、また先ほど申し上げたさまざまなアニヴァーサリーを含めた総合的な意味で、2月に大野和士とマーラーの「復活」を演奏いたします。中村恵理さんと藤村実穂子さんというすばらしい歌手も参加してくれることになりまして、このシーズンの締めくくりに大きなメッセージを届けたいと思っております。

そのほか、ヴァンスカ、ゲッツェル、鈴木優人ら、初共演の指揮者もおりますし、ルスティオーニのように人気のレギュラー指揮者も登場いたします。2020年度の都響もどうぞよろしく願いいたします。

【小川GM】 経営企画部の小川でございます。

続きまして、サラダ音楽祭の2019について、実施結果のご報告をさせていただきます。

後ろの資料でA4横判のサラダ音楽祭の実施報告という資料と、それから音楽祭のパンフレットをおつけしてございます。

パンフレットのほうには、具体的な詳細なプログラム等記載してございますので、適宜ごらんいただきながら、説明はこの実施報告の資料でご説明させていただきます。

おめくりいただきまして1枚目でございますが、音楽祭の来場者ということで、延べ3万6,820人の方にご参加をいただきました。

開催日でございますが、メインのプログラムは9月14日から16日の3連休、東京芸術劇場をメインの会場として実施したところでございます。

そのほかスペシャルコンサートとして、9月19日に芸劇、それから10月27日に日比谷公園の大音楽堂、野音でスペシャルコンサートを実施したほか、ミニコンサートにつきましては7月から各地で開催したところでございます。

その横でございますが、開催実績の①ということで、「OK!オーケストラ 赤ちゃん OK!歌ってOK!踊ってOK!」というOK!オーケストラ公演のほうを全2公演実施いたしました。

写真の右がお子さんが指揮体験をやっている写真でございます。

そのほかダンスですとか、みんなで合唱するコーナー等も設けたコンサートでございます。

その下、音楽祭メインコンサートは「ロメオとジュリエット」でございました。東京シティ・バレエ団等と共演したところでございます。

おめくりいただきまして②でございますが、「ベビーオペラ『ムルメリ』」ということで、こちらはスイスのバーゼル歌劇場で制作されたオペラ、赤ちゃん向けのオペラということで、2歳未満の赤ちゃんとその赤ちゃん連れの保護者の方のみ入場できるというようなことで、動物の鳴き声で表現したというような作品でございます。

その下が「オルガンでLet's SaLaD!」ということで、芸劇のパイプオルガンを使ったコンサートでございますが、右端の写真、東京ホワイトハンドコーラス、相馬子どもコーラスということで、聴覚障害のお子さんたちが手歌という、手で歌を表現するといったようなことを実施したコンサートでございます。

その次、③でございますが、「SaLaDワークショップ」ということで、約24ほどのプログラムを実施いたしました。

中には大野音楽監督による特別レッスンですとか、都響メンバーによる楽器の特別レッスンなどもありました。

真ん中の上、「バーチャルオーケストラを指揮しよう!」というところ、こちらがヤマハと共同制作をいたしまして、都響が演奏する風景の映像と音を収録いたしまして、バーチャルオーケストラということで、そこで指揮をすると、その指揮に連動して映像と音が

テンポを変えたりということ動くというようなバーチャル体験ができるプログラムでございました。

そのほか、歌ですとか、バレエですとか、作曲、ダンス等のワークショップも実施したところでございます。

おめくりいただきまして、④がミニコンサートでございます。全99公演を実施いたしました。実際100公演を予定したんですが、1カ所当日の天候で、デパートの屋上でやる予定のものが中止になって、99公演ということでございます。

池袋では芸術劇場のほか、西武鉄道の駅ですとか、デパートの屋上ですとか、それからサンシャインなどでも実施をしたところでございます。

上野につきましては、こちらは上野の東京都美術館と一緒にコンサートを実施したり、上野駅の中でも実施いたしました。

新宿がBIGBOX高田馬場、多摩地域でも井の頭の自然文化園、動物園ですけれども、そこでやったり、西武線の沿線の駅等でも実施したところでございます。

それから、⑤スペシャルコンサートでございます。

「ドラクエ・シンフォニックコンサート in SaLaD」ということで、すぎやま先生の指揮でドラクエのコンサートを行いました。

右端の写真が、これは段ボールのブロックでスライムをつくろうといったようなイベントを同時開催、コンサートの同日にこういった催しもしたところでございます。

それから、その下、「SaLaDポップスコンサート in 野音」ということで、都響としては47年ぶりに野音でのコンサート。曲目につきましても、映画音楽ですとか、アニメ音楽、それからミュージカルやジャズ等、クラシック以外の曲目も取り入れたポップスコンサートということで、司会は住吉委員にお願いして実施したところでございます。

左端に小池知事の写真が載っていますが、アメリカ出張の予定が急遽取りやめになって、サプライズでご挨拶に来ていただいたといったようなことでございます。

以上、簡単でございますが、実施状況の報告とさせていただきます。ありがとうございました。

【堤座長】 どうもありがとうございました。

ただいまの説明につきまして、確認したい事項やご質問等がございましたら、お願いしたいと思います。

また、ご意見につきましては、後ほどのご発言の中でお願いいたします。

それでは、いかがでしょうか。

【後藤委員】 サラダ音楽祭のご報告ありがとうございます。

一つだけ伺いたかったんですけども、このサラダ音楽祭の都響の部分、これは私の理解では、東京芸術劇場とか、いろんなところと一緒にやっているものだと思うんですけど、今、例えばアウトリーチのミニコンサートとかを見ると、芸劇ウインドとか、ほかの人たち、そのうち都響のメンバーが参加されたのがどのくらいとか、要するにかかわり、例えばワークショップなんかも都響以外の外部のそういうワークショップリーダーなんかも入っているのとか、その辺、組織はどういうふうになって、組織の中での都響の役割みたいな感じですかね。

【小川GM】 ミニコンサートにつきましては全99公演のうち、都響が実施したものが28公演、そのほか芸劇のウインド・オーケストラ・アカデミーメンバーによるものとか、新国立劇場のメンバーで、かなりの数は芸劇のメンバーにやっていただいたところでございます。

それから、コンサートにつきましては、先ほどありましたベイビーオペラの『ムルメリ』、こちらは芸劇の企画になります。

それから、オルガンコンサートにつきましても、これは芸術劇場の企画ということで実施したところです。

また、ワークショップにつきましては、芸術劇場のほうの企画としては作曲のワークショップ、こちらは藤倉大先生にエル・システムの作曲教室というところで、芸劇の企画でございます。

さらに、一番右下の芸術劇場トリセツというところも、芸術劇場の企画というところで実施したところでございます。

【後藤委員】 ありがとうございます。

【堤座長】 そのほかにはいかがでございましょうか。

もしございませんようでしたら、議事に入らせていただきます。

お手元の議事次第に従いまして、楽員へのヒアリング実施結果について、事務局よりお願いいたします。

【小川GM】 それでは、私のほうから楽員へのヒアリングということで、楽員の意見をお聞きしたところの内容につきまして、概要をご説明させていただきます。

資料に従いまして、ヒアリングの実施日といたしましては10月1日に楽員7名、グル

ーインタビューというような形で実施させていただきました。

それから、10月4日にはソロ・コンサートマスターの矢部さんのみということで、当日は皆様にはちょっと直前のご案内になってしまいましたので、なかなかご参加いただけなくて、吉本副座長のインタビューということで、近藤理事長にご臨席いただきまして、実施したところでございます。

それぞれ質問項目と、これに対する楽員の意見ということでまとめさせていただいております。

質問項目が6項目ありまして、それぞれに細かな内容についての質問ということになってございます。

1点目が都響のブランド、運営の基本方針についてということで、都響のブランド、楽団のイメージ、都のオーケストラとしての役割は何だと思いか。それを強化するためには何に力を注ぐべきかといったようなところの質問につきまして、楽員の意見といたしましては、まず都響のブランドですとか、楽団イメージということについては、都民に対して質の高い音楽を提供するということと、全ての都民に音楽を届けることといったような意見でございまして、おおむね都民のオーケストラだといったようなブランドイメージといったような意見が多くございました。

一方で、そこに対して発信力と実行力が大事だということで、なかなかそれができていないんじゃないかといったような厳しい意見も出たところでございます。

演奏の質ということでレベルは上がったけれども、その発信力が弱い、ブランド力やイメージが少し地味だといったようなところも楽員からの意見として出たところでございます。

それから、次に、都響が今よりも発展するために何が必要か。都響の将来ビジョンをどう考えるかというところで、楽員のほうからもビジョンをつくるべきだといったところは、これまでも事務局に対して発信しているといったような意見がございました。

その中で、都響の将来ビジョンということについては、東京都が都響をどう活用するのかといったような、都を含めた大きなビジョンを考えるべきだといったような意見も多くございました。

次に、指揮者、音楽監督への期待ということで、オーケストラでは指揮者がすごく重要なので、世界トップレベルの指揮者のもとで演奏できるということが大事だといったような意見でございました。

それから、外国人の起用について、いろんな国籍の方がいたほうが刺激になるといったような意見で、特に嫌がっているわけではなくて、オーディションで結果としてということなので、オーディションで入ってもらえれば問題はないだろうと。

それから、限られた時間と予算・人員の中で、さまざまな事業の優先順位をどのように考えるかといったようなところについて、人それぞれで意見は違うかもしれないがという前提ではございますけれども、やはり一番大切なのはよい演奏をすることだといったようなところ、それから定期公演でいいものをつくり続けることが大事なのだといったような意見が多くございました。

それから、2項目め、演奏活動についてということで、1点目、ゲーム音楽・アニメ音楽、映画音楽、ポップス等はどうかということにつきまして、都響でやるべきものであればいいとか、やるとしても都響らしさが必要じゃないかといったような意見。

それから、新しい聴衆を獲得するということはあるけれども、闇雲にその分野のコンサートをふやして、主催公演が減るといったようなことは望ましくないといったような意見がございました。

それから、現代音楽や委嘱新作等、それからオペラ等についての考えでございますが、現代音楽もオペラも、やる意義があるといったような意見。ただし、こちらもそれだけにしないようにといったような意見でございました。

それから、都のオーケストラとして、多摩地域や島しょ地域での演奏ということで、当然その必要性については認識しているといったこと。

それから、島での公演などはいい経験、いい勉強になるといったような意見もございました。

楽員の方からは、その必要性は常に訴えているということで、さらに都のオーケストラでの義務でもあり、議論するようなことではないといったような意見もございました。

それから、海外公演、国際交流等についてですが、こちらはやはり積極的にやりたいといったような声が多くございました。

3項目目がアウトリーチ・地域プログラム等についてということでございますが、小中学生等に向けた現状の教育プログラムについてということでございますが、音楽鑑賞教室は都響の柱の事業であり、今でも先生方との反省会も実施しておりまして、先生方にも好評いただいているといった意見。

一方で、ややマンネリになっていないかどうかというのが心配だとか、あるいは、今の

子供たちが喜んでいいのかどうかかわからないような反応がふえてきていると。昔はつまらなければつまらないという反応もあったというのが、今は聴いていても反応がストレートに返ってこないというところがちょっと心配だといったようなことで、何かもっと工夫が必要なのではないかといったような意見も出てございます。

それから、アウトリーチや地域プログラム等でさらに積極的に行うべきかどうかということでございます。

特に小規模の出張演奏ですとか被災地支援などは、もともと楽員が始めたものだということで、東日本大震災の後の被災地支援については、楽員のほうから都の生活文化局に手紙を書いた結果、都議会でも取り上げられて予算もついたといったようなことで、もともと積極的に考えているといったような意見でございます。ただし、楽器によって余り参加できないようなところもあるという意見もございます。

それから、都の補助金のためにやるということではなくて、もともと音楽を聴けない子供たちのところに音楽を届けるといったことが本質なんだろうといったような意見もございました。

それから、対象の拡大、医療・介護と連携したプログラムについてということですが、LSOでやっているような何十種類ものプログラムをやるというのはなかなか難しいかなというところがございますが、そういったスペシャリストのアイデア、コネクションなんかがあるといいといった意見や、ベースになる演奏に支障がないということであれば、積極的にやるべきだといったような意見がございました。

それから、新たなアウトリーチ活動、地域プログラムとして考えられるものはあるかということで、昔、ジョイントコンサートをやっていて、そういったものも復活したらいいんじゃないかという意見ですとか、聴かせるだけじゃなくて一緒に音楽をつくるといったようなものも取り入れるべきといったような意見がございました。

4項目目が楽団員の技能向上、次世代の育成についてということで、例えばアパートの防音化のための資金援助ですとか、留学制度の拡充など、楽員の技能向上のために何ほどの程度緊急かといったような質問でございますが、そもそも防音ですとか、留学とか、必要なものではありませんけれども、楽団にその資金があるのかどうかというのが、心配ですといったような意見がございました。

そのほか、技能向上ということでは定期演奏会の本番を重ねるですとか、あるいは地方公演なんかも大きな成長につながるといったような意見がございました。

それから、オーケストラ・アカデミーの設置など、次世代の育成についてということで、アカデミーの構想自体は昔もあったけれども、直前で中止になったという経緯があるとか、あと、それから音楽大学の人たちと一緒にそういったことを考えていくべきじゃないかといったような意見がございました。

それから、若手指揮者、作曲家の育成についてということでございますが、今音楽鑑賞教室などでは何人か若手指揮者に振ってもらおうようなことをしているという中で、そのほかにありました意見としては、マケラ、先ほどもちょっとプログラムの紹介がありましたマケラ氏やフルシャなどは、そもそも若くてもすばらしいということで、指揮者を若手指揮者とかベテラン指揮者という考えはやめるようにしているといったような意見もございました。年齢の問題じゃないんだといったような意見でございます。

それから、5点目、最後に広報活動についてということで、ファンとのかかわりについてどう考えるかということで、今でもサポーターズパーティー、この間もやりましたけども、それとか、都響倶楽部との懇親会というのは楽員も積極的に参加をしていますということです。

それから、動画の配信についてですけれども、動画の配信については積極的に賛成をしているところだということでもございました。

ただし、都響に興味のある人が見ているだけかなというところもあって、都響を見たことのない人に動画を見せるための方法を考えたほうが良いといったような意見もございました。

その他広報活動として考えられることはないかということでございますが、楽員の意見としては「都響カフェ」という、都響の音楽を流して、たまにそこで演奏も行うといったような「都響カフェ」みたいなものをつくったらどうかといったようなことですか、それからインスタ、それからグッズの販売、Twitter、SNSといったようなところの意見がございました。

最後に演奏会場、練習場についてということで、都響の練習環境や本番会場について改善点があるとしたら何かという質問については、やはり本拠地ホールが必要だということで、ぜひ懇談会の委員の皆様の提言として、本拠地ホールが必要だと、そういった提言を都に対しても見えるような形でしていただきたいという意見がかなり強く出てございます。

簡単ではございますが、ご報告とさせていただきます。

【堤座長】 どうもありがとうございました。

それでは、報告書（素案）につきまして、吉本副座長より説明をお願いいたします。

ご質問やご意見につきましては、説明が終わってから時間をとりたいと思いますので、よろしくご協力をお願いいたします。

では、吉本副座長、よろしくをお願いいたします。

【吉本副座長】 報告書の素案の説明の前に、楽団員のヒアリングは、今ご報告いただいたとおりなんですけど、私が代表でやらせていただきましたので、率直な感想をお話ししておきたいと思います。まず7人の楽団員の方々に、質問項目をに沿って行いました。懇談会では、あれもやったらいい、これもやったらいいという意見が多いので、楽団員の皆さんは、そんなに言われても困る、みたいなニュアンスかと思ったんですけど、全然逆で、もっと積極的にやりたいと。質問項目にあることについては既に議論したこともあるというような感じでした。

それから、矢部コンサートマスターは、もう30年やっていらっしゃるということで、やはり都響に対する強い思いを感じました。30年で確実に都響の演奏能力は高まっているとおっしゃっていて、コンサートマスターとしての強い思いというのをひしひしと感じるような、そういうヒアリングでした。

続いて報告書の素案なんですけども、これは事務局とも相談しながら、きょうはあくまでも素案ということで用意をさせていただいたものです。

それで、はじめにとして、たたき台とここに書いてあるんですけども、これは懇談会で報告書を出す以上、堤座長のお言葉が必要だろうということで、私のほうで作文をしたものです。

先ほども堤座長にちょっとお断り申し上げたんですけども、本来であれば座長に書いていただくところ、申しわけございません。

ただ、これを書いたのは、いろいろと書いてありますけども、4段落目の、懇談会では、10名の委員が、それぞれの専門の立場から都響への親しみと期待を込めて、自由闊達に議論を行いました。

それを提言としてまとめて、懇談会委員の主な発言と都響の現状についてあわせて整理しましたと書かせてもらいました。つまり、この報告書はそういう構成でまとめたものになっています。

それで、1ページ目以降、かいつまんでご説明をしたいと思います。

懇談会の意見というのは本当に多岐にわたっていたんですけども、全体を大きく6項目

に整理をしております。

1 ページ目にあるのが演奏会活動について。それから次、3 ページ目が、都民との交流プログラム、地域交流プログラムのようなこと。次が5 ページ目の人材育成、次が6 ページ目にあります広報活動のこと。それから、7 ページ目の都響としてのブランドとかビジョンについて。

そして、6 番目が財政基盤とか演奏環境を整える、その六つの項目に懇談会の意見を整理しまして、それぞれに提言のようなものを報告書として取りまとめた形になっております。

もう一度1 ページに戻っていただきまして、はじめからご説明したいと思います。

最初に申し上げるべきでしたが、この報告書の作文は近藤理事長からのご指名で私がやらせていただきましたが、それで大丈夫かどうか不安なので、ぜひ、皆さんのご意見をいただいて、ブラッシュアップしたいと思っています。

提言の1は、演奏会について、「都響ならではの演奏を極め、ひろげていく」という見出しで、枠の中は、読ませていただきます。

現代作品への取り組みなど、都響のこれまでの実績や強みを活かし、オーケストラ音楽のさらなる高みを目指した質の高い定期公演、演奏会活動の拡充に尽力されたい。あわせて、新たなファン層の獲得につながるプログラムの工夫、都が設立した交響楽団として多摩地域・島しょ部での演奏活動の継続、野外コンサートや海外公演、国際交流などへの積極的なチャレンジが望まれる、と記載をしてみました。

その下の部分なんですけども、懇談会での主な意見というのを、これは事務局にお願いしてピックアップしてもらったものを、私が一部編集させてもらいました。五つ目の項目など網掛けのものが幾つか出てきます。同じ項目について懇談会では前向きな意見と、必ずしもそうではない意見が両方出ましたので、今は一応両論併記のような形にしております。

ただ、これが提言、報告書として出たときに、反対意見も一緒に出ているというのは違和感がありますので、このあたりはきょう、ぜひ、ご議論いただきたい部分です。

演奏会活動のところは項目として幾つかに分かれているんですけども、一つ目は演奏プログラムを拡充しようということですね。

そして、該当項目に関する都響の現状もあわせて整理をしてございます。

二つ目は、来場者の新規獲得ということで、これはゲーム音楽、アニメ音楽等のご意見

が出た部分です。

それから、三つ目が次のページの演奏会の開催地の話ですね。多摩地域や島しょ部でも既にやられているということですが、これは都響の重要な要素だろうということです。

それから、4番目が海外公演・国際交流というふうになっています。

続きまして、提言の2ですが、これはアウトリーチとか地域交流プログラムのところなんですが、提言のキーワードとしては、「あらゆる都民、コミュニティとつながる」というふうに書いてみました。

枠の中を読んでみます。

子どもから高齢者、障害者、LGBT、外国人など、あらゆる都民やコミュニティに都響の音楽活動を届ける取り組みに期待したい。その際、従来のアウトリーチ活動、音楽鑑賞教室にとらわれることなく、新たなプログラムの開発や対象の拡大が望まれる。2018年度に立ち上げた「サラダ音楽祭」はその先駆となるものであり、上野に拠点を構える利点を活かした美術館や博物館、東京藝術大学など他団体との連携による新たな可能性も模索したい、と記載してみました。

この項目に関しても幾つかに分かれていて、アウトリーチ活動の拡充という部分に、網掛けをしたご意見が二つあります。アウトリーチをやっても東京のようなメガロポリスで果たして大丈夫だろうかとか、都響だけでは東京都全体をカバーできないとか、そういうようなご意見もありましたので、一応今の段階ではそれも入っています。

それから、二つ目が新たな教育プログラムの企画ということで、従来やっているものだけじゃなく新しいものをやったらどうかというようなこと。

その続きになりますけども、障害者のためのバリアフリーの充実ですとか、被災地支援の話、それから、そういったプログラムをやるには、公共機関・他団体との連携が必要だというご意見もありましたので、それぞれの項目で整理をいたしております。

次の大きな3番目は、人材育成で、「次代の担い手を育てる」というキーワードにして、このように記してみました。

次代の演奏家や指揮者、作曲家を育てることは、都響ばかりかオーケストラの将来にとって不可欠の要素である。演奏会やアウトリーチ活動における若手演奏家への学びの機会の提供、都内の芸術・音楽大学と連携したオーケストラ・アカデミーの開設なども検討されたい。

人材育成のところは、若手アーティストの育成という一項目だけになりますけれども、

主な意見を記載してございます。

次が提言の4、広報活動に関してです。ここはキーワードとして、「IT技術のさらなる活用と顔の見える都響に向けて」としてみました。

枠の中は、動画配信やSNS活用の強化、多言語化を含めたウェブサイトの充実など、ネット環境やIT技術を駆使して都響の存在や活動を国内外に広く伝えるとともに、楽員自身の投稿による発信、交流会やパーティ、アウトリーチ活動などを通じた顔の見える都響を目指すことで、ファン層の拡充、定着を図りたい、と記載をしております。

このパートは三つの項目があるんですけども、1番目は広報活動を充実・強化しようというご意見、いろいろいただいております。

二つ目は、ファンとの交流ですね。

そして、三つ目が訪日外国人、海外に向けた広報の充実・強化ということで、それぞれ主なご意見と都響の現状を整理してございます。

その次、5番目がビジョン・戦略についてです。

このキーワードは、「都響ブランドとビジョン・戦略を明確に」とさせていただきました。枠の中は、国際性と地域性を兼ね備えた都響ブランドを明確に打ち出していきたい。そのためにも、半世紀前の設立の理念や趣旨、これまでの実績を尊重しつつ、未来の都響の姿や目標を示すビジョンや方向性を策定し、その実現に向けた中長期的な戦略を描くことが重要であると記載をしてみました。

このビジョンと戦略についても、幾つかに分かれているんですけども、都響のブランディングや新たなビジョンの策定に関してのご意見。

それから、楽員のモチベーション。

そして、3番目が事業ポートフォリオの明確化で、それぞれの項目について、ご意見を整理しております。

最後、6番目が、財政基盤と演奏環境ということで、キーワードは「財政基盤と演奏環境を整える」。

枠の中ですけども、財政基盤の強化に向けた取り組みを加速、拡充させるとともに、かねてから懸案となっている本拠地ホールについても、東京都の文化政策における都響の位置づけや役割を視野に入れ、都立文化施設の運用見直しを東京都に提案するなど、可能性を模索したい、という記述にしてみました。

ここは財政基盤の話と、練習環境、本番会場の2項目なんですけども、特に先ほどの楽

団員のヒアリングの中でも、本拠地ホールについて結構強いご意見が出ていたんですが、このことについてはまだ懇談会で余り議論できていませんでした。

【池田委員】 最初に大野さんが言ったんだけどね、みんなスルーしちゃったんだよね。

【吉本副座長】 ですので、この部分は議論が必要かと思うんですが、9ページの一番下の項目は、懇談会での私の発言として書かせていただきました。都立文化施設である東京文化会館、東京芸術劇場で音楽監督の指揮する定期演奏会だけでも、本番と同じ環境でのリハーサルを実現できないかと。

本拠地ホールをつくると言っちゃったら、途端にハードルが高くなり過ぎるので、まずはそれぐらいからスタートするのもあるんじゃないかということで、私の意見として入れております。

このことについて、ヨーロッパなんかでもなかなか本拠地ホールというのは厳しくなっているというご意見も最初にいただいておりましたので、きょう議論をいただきたいところです。

説明は以上なんですけども、この後の報告書のまとめについての議論の進行も私が行うようにということでしたので、続けさせていただいてよろしいでしょうか。

まず、報告書のまとめ方としてこういうもので大丈夫かどうか。つまり、懇談会の議論に基づいて、都響に対して提言をするということですね。

あわせて、提言内容に関連する主だった懇談会のご意見を今のようにピックアップして記載すると。

また、懇談会で意見を言いっ放しということではなくて、都響でも実際に既にやっている部分もありますので、現状もちゃんと踏まえていますよということを報告書で示す必要があると思いましたので、それに関連した都響の現状もあわせて記載してあります。

この報告書のまとめ方としてこういう形でいいかどうかというのが1点目ですね。

それから、全体として6項目に整理しましたので、この項目立てが適切かどうか、抜けているものがないのかも含めて、それが二目にご議論いただきたいところです。

そして、三つ目は、仮にこの6つの項目でよさそうだということになった場合に、このキーワードですね。太文字で書いてある部分の表現、あるいは四角の中での記述内容について、ご意見をいただきたいというふうに思います。

まず最初に、1点目です。報告書のまとめとして、今回のように提言があり、懇談会の意見があり、都響の現状があるというような構成についてはいかがでしょうか。

【池田委員】 問題ないと思いますけど、どこまで踏み込むかということで、ずっときのうもこれ、パソコンで送られてきたのを読んでいて、例えば三多摩とか島しょ部というふうに呪文のように出てくるけど、例えば、自主運営のオーケストラへの実質的な補助事業とか、それを阻害要因と思われるものは具体的に挙げづらい。

【吉本副座長】 あちら側から見るというところですね。

【池田委員】 官業による民業の圧迫、と反発を食らう可能性があります。

気兼ねさえしなければ、都響は満遍なく都民のオーケストラとして回れる環境が整うとは思いますが、そこまで突っ込んで書いていいのかなどと思いながら読んでいました。

【吉本副座長】 そうですね。この懇談会の主な意見を書いたほうがいいと思ったのは、例えば今のような突っ込んだ意見は、池田さんのお名前は出ませんが、懇談会からそういう意見もあったということでは書けるわけですよ。

【池田委員】 何となく僕や片山さんが結構激しく言い過ぎたのを反省していて、考えてみたら回れない理由というのももう一方ではあったなというふうにだんだん頭が追いついてきたんですよ。もちろん、美濃部亮吉都知事時代に始まって、今も在京オーケストラが並び大名のように出演している日本演奏連盟主催の「都民芸術フェスティバル」とか、もはや高いモチベーションを維持しづらくなった催しは、本当に何とか整理しなければならない段階に来ています。形骸化したところにも顔を出さなきゃいけないけど、本当はやりたくないとかね。そういう整理がついていないということは、日本のガラパゴス化の、これも一端なんですけど、ご多分に漏れずというところがあってちょっとかわいそうかなという気が、昨日これを読んでいてしました。

【吉本副座長】 ありがとうございます。

そのあたり、どこまで突っ込んで書くかというのはなかなか難しいところです。項目によってどこまで書けるかということもあるでしょうし。

【国塩芸術主幹】 ちょっとよろしいでしょうか。もう少し事実関係をいろいろ調べていただいた上で書いていただくことがいいと思います。実際に、多摩地区や八王子のほうは毎年主催公演を行っていますし、東京都から委託されているプレミアムコンサートもありますし、島しょにも弦楽四重奏などでしばしば出かけております。ですから、闇雲にそれよりたくさんふえればできるかという、そういう問題でもないし、今、池田さんがおっしゃったような状況はあるにせよ、他のオーケストラとのすみ分けがある程度できているのかもしれないというふうには思っていますので、もう少しこちらでも取材した上で、必

要なことをお書きいただければありがたいかなと思います。

【池田委員】 演奏会場が多いし、いろんな編成の可能性もあるんで、従来の枠組みにとらわれない発想でコンサートを制作して、そこに都響の楽員も自然に出場できるような環境の整備が必要だみたいな話だとは思うんですね。

それから、ちょっと前後しますが、僕の意見でもう一つは、それからLGBTと出てくるところの枠の中に、ダイバーシティという言葉はどこかに入れたほうが今っぽいと思うんですけど。

それから、練習場に関しては、この間、井上道義さんとずっと話していて、ふと気づいたのは、財政基盤に多少のゆとりのあるがためか、東京の上位3オーケストラが練習場というのをつくっちゃったから、本番のホールで練習ができないという大パラドックスなんですね。N響は高輪に練習場を持ち、都響はこの文化会館の地下に持ち、読響も川崎市の黒川に新しい練習場を建てました。結局本番と同じ会場で練習ができるのは当日のゲネプロのみというのが、比較的裕福な上位三つのオケに起きてしまっているというねじれ現象がありますね。

でも、NHKホールは別として、三つのそのN響、都響、読響の中で、都響は東京文化会館と東京芸術劇場という既存の立派なホールがあるわけですよね。ですから、新しくつくることなく、そのどっちかで練習から本番まで、できればここに事務局もあるからこのホールで練習も行うべきなのですが、民間の大手主催者がオペラやバレエの大規模な公演のため、かなりの日数を枠として実質の優先予約で押さえていて、都響の割り込む余地を狭めているのが実態です。新しいものをつくるというのはお金が要るけど、既存のところでも利権さえ整理すれば不可能、あるいは無理難題ではないということは、やっぱり何となくどこかでおわせたいなと思います。

【吉本副座長】 そうですね。それは、一番は東京文化会館であり、二番目は芸術劇場ということになると思うんですけど。ありがとうございます。

【後藤委員】 それに付随してですけど、結局何か本当に根は深くて、ホールの問題とオーケストラの問題という、ヨーロッパのようにそれが一つの組織の中にあるという、だから本当に私も難しいなとは思いますが、結局ホールがどこかの一つのオーケストラになかなかコミットしたがるという、ホールの性格もあるんでしょうけど、公立のホールであったりとか、あるいはサントリーホールみたいに、やっぱりどんなオーケストラにも開いていたいという部分も、その例外がきっとミュゼとトリフォニーなんだと思うんで

すけれども、私も個人的には新しいホールよりはどこかとそういうそれを乗り越えて、どこかたくさん既にあるホールと提携できるのがやっぱりいいのかなとは思いますがね。

やっぱり日本は、そもそも東京はヴェニューが多いですからね。フルに利用されていないホールもありますし。もちろん、そんなことは百も承知のことだとは思うので。

【池田委員】 何かね。原因がわかっているのにどうしようもないという、鬱陶しい感じの話。

【吉本副座長】 ほかにはいかがでしょうか。

【池田委員】 あと、ごめんなさい。もう一つ、この間、ナクソス、今や世界最大のレコード会社になったナクソスの創業者で会長の86歳のクラウド・ハイマンに久しぶりあって、最近結構いいオケの新譜をばんばん出しているんですね。そんなにお金あるのというのと、いや、コストゼロだと。今はヨーロッパのオケの大半が、自分のオーケストラの音楽コンテンツをちゃんと人に聴いてもらうということで、ホール代も出演料もただ。だから、公演のライブ録音をただで出して、それで別の収入を要求しないんですって。レコーディングも楽員の給与の一部というふうに職務規定がなっていて、だからレコーディングは楽員として雇用契約を結んでいる人の義務だから、それに対して特別に対価を払わないということが主流になっているので、結構いいオケで録音ができるんだと言っていました。

日本がそういうオケに比べて特段上手ではないのに、いまだに高い金を言うのは全くおかしいと延々と、割とやっぱり老いの一徹で延々と逆に僕なんか日本のオケ代表みたいに怒られちゃったんだけど、そういうところも本当は一つ一つ直していかないと、国際知名度を上げるには壁になっていると思います。

【吉本副座長】 ありがとうございます。

ほかの委員の皆さん、いかがでしょうか。

この報告書の構成、あるいは項目等についてのご意見でも結構ですけれども。

湯浅さん、お願いします。

【湯浅委員】 前回、ここ最近出席できていないので、もしかしたらもう既に説明があったことではないかと思うんですけれども、確認で質問させていただきたいんですが、そもそもこの報告書は誰の受けたものであって、それによって何を期待するのか、何が起きるのかということ、ちょっと確認をしたいんですね。これは、この懇談会から都響の皆さんにどうぞというもので、それに応じて都響さんのほうから、それぞれの計画もあるでしょうけども、アクションプランを出していったり、この次に反映させるものなのか、より

パブリックに広報的に使うことに重きを置いているものなのか、そこら辺によって全く意味合いが違ってくるのかなと思うんですけども、逆にこれをもって都響はこうしていきますという宣言的に使うのかどうか。ちょっと、そもそものところで申しわけないんですけども。

【小川GM】 まず、このいただいた提言の扱いでございますが、実は今、都響では2020年までを期間とします中期経営計画というのがございます。

その中期経営計画が2020年までですので、それ以降、また計画をつくる際に、この懇談会の意見を反映する。できるもの、できないものというはあるかと思いますが、中期経営計画に反映するという前提でご提言を我々は受け取るといったようなふうに考えてございます。

もう1点、この懇談会の報告は、前回もありましたとおり、皆様にお配りするのはもちろん、ホームページ等で一般にも公開をいたします。ということで、皆様からいただいたご意見というのは広く一般にも公開しつつ、その中で反映できるものは楽団の中期経営計画に反映するといったような位置づけで考えてございます。

その中で、当然対東京都に対してもこういう提言をいただきましたということは、ご報告をしていくというふうに考えてございます。

【近藤理事長】 ちょっと補足しましょう。

この懇談会の言い出しっぺで、皆さんに委嘱をした本人として、今の小川君の発言と矛盾は全くしませんが、私が期待しているところをご紹介します。私としては世界のオーケストラが今、あるいはクラシック界が今直面している大きな問題に対処していく上で、都響は何ができるのか、何をすべきなのかということを皆さんと共に真剣に考えたいということなんです。

そこには、やや大げさに言えば経済や、AIを中心とする大きな社会の流れの中で、文化芸術はどうあるべきか姿、その果たすべき役割は何か、その本来の力が思うように発揮できていないのではないかと。という問題意識があります。その一つの表れがクラシックの衰退、あるいは右肩下がりとすればクラシックの持つ価値を信ずる我々としては、そこにくさびを打ち込んで、問題の本質を明らかにし、できるところから前に進んでいきたいのです。ほかのオケやほかのクラシック関係者とも、連携していくことを模索する上で、何か一石を投じたいというような気持ちが一番最初にあったわけです。

ですから、当然、この懇談会の議論も提言書もパブリックにするつもりです。もし、必

要があれば提言の際に記者会見でもやって、座長、副座長に説明していただく。私がそれに対して、都響としての反応をお答えすることも考えられます。もし、それが意味があるのであれば。それぐらいの覚悟で、公の下で我々は真剣に皆さんから意見を聞いて前に進みたい、少しでも事態をよくしたいという、そういう我々の意図のあらわれなのです。

それは広報宣伝かという、そういう面もあるかもしれませんが、単に都響すごいでしょう、都響うまいから、もっと来てよとか、もっと寄付をお願いしますというのではなくて、都響としてこのように真剣に考えてやっている、その姿勢を公にして、協力できる所と協力していきたいという、そんなようなのが問題意識というか発想だったんですね。

ですから、こうした過程を通じて問題を提起し、それによって、何か少しでも都響に対して意見が出てくれば、プラス、マイナスも含めて、それは非常にうれしいことです。そういう議論の場が必ずしも十分ないのではないか。思わぬ反応があるかもしれませんが、それに対しておとなしくしているのではなくて、少し打って出たらどうかという、そういうような気持ちの背景にあります。

【吉本副座長】 湯浅さん、今の点は大丈夫ですか。

住吉さん、お願いします。

【住吉委員】 ごめんなさい。私は、事前にこれをちょっと受け取っていなかったの、今、初見なので、全部ちょっと詳細に読めていない中で感じる事なんですけど、それこそ詳細に読まないとわからないぐらい細かい意見がぶわっとなっていることが、最後の報告書として何か適切な形なのかどうかが、少し何となく今見て疑問だなと感じるといいますか、結局すごく具体的な、一つ一つ本当は些末じゃないんですけど、いっぱいあるのをいっぱい並べると些末なことがいっぱい並んでいて、最後に何の話だったと言われて、何かいろいろというふうに入ってなると思うんですけど、結局みんなでこうやって議論したのは本当に多岐にわたっていたので、まとめるのってすごく大変だとは思いますが、こうやってすごい項目数が多いと、すごく薄まると、ちょっと何となく議論しないでもわかるようなことと、すごく細かいなみたいなことが何か並んでいる感じで、心に残りにくいというあれなんですけど、そういう印象をまず受けるのが、果たして何となくちょっともったいない。

このこと自体が例えばパブリックに誰か読んでも、余りこれによって心を動かしてくれる人がいないかなというのが、少し何かもったいないかなということを感じるということ。

あと、書き方としても、意見と現状というのがありますが、これをもしパブリック

に私が読んだら、何か出た意見に対して、都響がすごい全部言いわけしているみたいな、何かすごい会見の質問と回答みたいな感じにちょっと感じて、オペラをもっとやったほうがいいと言ったら、基本的に年1回やっていますみたいな、野外でやったほうがいい、1回やりましたみたいな、何かそういうのももったいないというか、多分そういうことではない議論を私はここで感じてきたので、何か形として少しもったいないのかなという。

すごい本当にいろんな皆さんの意見があったので、まとめるのは大変だと思うんですけど、もし、その問題提起をと今お話があったような、近藤さんのお話のような形でするなら、私がこの場に来てすごく、この場で全てが解決するわけじゃなく、やはり根深いし、みんなで本当に考えていかなきゃと思ったのは、問題だと思っていたこと一つ一つにはやっぱり理由があったという。

後藤さんがおっしゃったように、その練習場がないというのは、オケと会場の経営が分かれていて、それぞれの事情があるから理想的な形が成しとげられない。そうなのかという、特にパブリックに読む方なんかは、今の現代社会の、ヨーロッパもそうになってきている、現代社会におけるオーケストラというものの存在の根源的な問題が見えてくるというか。

そういうようなこと、答えは出ないけども、こんなに根深い問題があったよというところが、ここの場での発見感が少し織り込まれると、より問題提起としては心に響くといえますか、そういうものにならないかなということを感じました。

もちろんこれだけで決して問題が解決できないと思いますし、これを受けて全部都響が、はい全部やりますみたいなことも現実問題無理だと思うんですけど、せめてよりよく、もしいろんな条件を取り払ってするとしたらどうなのか、どういう社会的な条件や今の時代だからの実情が邪魔をしているのかが深さとして何となくわかると、よりよい提言書になるかなということを感じます。

【吉本副座長】 ありがとうございます。

これでは心に残らないと言われちゃうと、なかなか厳しい部分がありますね。結局どこまで突っ込んで書くか、言い切りとして書くかって非常に難しい。それで、今のご意見に関して一つ考えていたのは、この体裁のままだと、確かに全部がのんびんだらりとしちゃうので、その六つの提言だけを最初にまとめて、1ページか、長くて2ページだと思いますので、それだけとりあえず読んでもらえれば、ここで議論したことの概要がわかるというのが一つあるんですね。今回はできていないんですけど。

それから、もう一つ都響の現状のところは、実は事務局からいただいたのはもっと言いわけがいっぱい書いてありました。これでもそういうものは全部取ったんですね。現状だけになっているんですよ。何回やりましたとか。

だから、それでも言いわけに見えるとなったら、これは全部取ることになるんですけど、でも、そうすると都響がやっている現状を全く知らずに我々提言したことになるので。

【住吉委員】 これ、すごく技術的なことになりますけど、せめて先に現状があって、それを受けて我々が議論したという、実際この場では途中でご説明があった上で議論を続けるということがあったので、体裁でという意味でいうと、先に来て、それを受けて議論した形にするだけでも、何か印象は違うかなと。本当に些末なことですけど。

【吉本副座長】 そうですね。だから、本当に技術的なことでいうと、今、懇談会の意見があって都響の現状になっているので、その順番をひっくり返す。それに加えて、懇談会のご意見は事務局のほうで実際の発言記録から、ある種要約して書いていただいています。そこを多少脚色してもよろしければ、加筆修正というか、編集することはできると思うんですけどね。

それと、あとは繰り返しになりますけど、この提案内容に関して、必ずしもそれを後押しする意見じゃない意見も入っています。私はそれは取ったほうがいいと思うんですけど、その点も議論いただきたいんです。

中根さん、お願いします。

【中根委員】 吉本副座長が大変ご苦労されて書かれたたたき台だと思います。大変ありがたいと思っております。

私自身は、ここに書かれている項目立てで、基本的に我々がこれまで議論してきたことと大体重なるのでいいのではないかと思います。

もちろん今、住吉さんの意見に基づいて吉本さんが言われたように、最初にまず現状がこうなっているということを書いた上で、我々懇談会としての提言という形にしたほうがすんなり頭に入ってくるのかなという気がしますので、そこは改善点の一つかなというふうに思います。

現状のところは、先ほど池田さんや後藤さんが言われたような本拠地の話とか、練習場をどうするかということについての、現状は今こうなっているみたいなことを簡単に付け加えて、それをベースにしての提言ですということにしたほうがわかりやすいのかなという気がいたします。

それから、反対意見が網掛けになっていることについては、やっぱり全体がこの懇談会としての提言ということなので、こういうことを言っていながら実はこういう意見もあるというのは、何かメッセージとして、一定方向を向いていないという気がします。

ただ、もちろんこういう意見があった、あるいはこういうことも留意しなきゃいけないというような形でどこかに少し出てくるという形にした上で、提言としてはある一定の方向性を打ち出しているという構図にするのがいいのかなというふうに思います。

以上です。

【吉本副座長】 ありがとうございます。

湯浅さん、お願いします。

【湯浅委員】 最初に本当に吉本副座長、お礼を申し上げたいというか、割と自由に発言をさせていただいている懇談会だったなと思うので、それをこうやって統計立ててまとめていただくのはすごい大変だったんじゃないかなと思うんですけども。

個人的にパブリックにも見えていくもので、かつ提言みたいにするんであると、じゃあ何が課題だったのかということに最初はやっぱり関心があるんじゃないかなと思うんですけどね。

割とそれぞれの委員の方が、そして説明をされたいろんなケースもお題を与えていただいて自由につないだという、課題がベースで何かを提言するということではないような今までの議論だったような気がちょっとするんですね。

何か、例えばあらゆる都民とつながるといのは、一方で見ればすごいやっていますよということでおっしゃるんでしょうし、でも、じゃあなぜこれをあえて言うのかとすると、本当はじゃあ誰に言っていないのかとか、何かそういう現状があった上でこういうことがあると何か説得力があるんだろうなと思うんですけど、もしかしたら、でも課題としてはそういうデータがないということなのかもしれないので、何となく提言という強い言葉で言うのであれば、これが課題みたいな感じのほうがいいのかな。でも、その情報があるのかなという、何かちょっと難しいなと思いますけれども、6個、7個の章立てというか、項目立てとしてはこういった内容をお話ししていたので問題ないかと思いますが、何か都響の現況といのはやっていることが書かれているので、それが足りている、足りていないといのはこれではわかりませんよね。だから、そこに課題とかギャップみたいところは見えてきていないので、何となく平行線な感じがちょっとするかなという印象です。

【吉本副座長】 ご指摘の部分は全くそうだと思います。ただ、ちゃんと調べていないの

で、書けないんですよね。都響が何をやっているかは事務局に整理してもらいますけど、例えば都内のほかのオケと比べた場合にどうかとか、あるいは国際的に見たときどうかという話になってきちゃうと、相当リサーチが必要になるので、懇談会の議論だけではまとめ切らない部分ではあると思うんですね。

【池田委員】　さらなる躍進に向けてと明るく書くのがいいのか、音楽の危機をどう乗り越えるかと書くのがいいのかというね、あれはあるけど、ちょっと自分のメモを読み上げたいところがあって、先週ベルリン・フィルが、今回は日本だけの単独ツアーというのは5年ぶりだったんですね。いつもは韓国や中国を回るんですけど、それで珍しく福岡も、名古屋も、大阪も、川崎も、東京もサントリーホールで3公演やったということで、そのとき記者会見が、2019年11月19日にあつて、そのときに、昔の壁のあった時代はベルリン市の直営でしたけど、今は財団方式の民営で、理事長で総支配人のアンドレア・ティーチュマンは女性です。ベルリン・フィルは1957年以来、29回目の来日だったんですけど、山田治生さんという私の同業者の音楽評論家の方が、その間にどういうふうなベルリン・フィルの日本の見方は変わりましたかと言ったときに、ティーチュマンが「今やグローバルスタンダードを標榜するオーケストラは、ウィーン・フィル、ベルリン・フィルに限らず、全て日本にやってきます」と。さらに、そこから先が驚いた。「この50数年間で日本のオーケストラの技術水準向上には驚異的なものがあり、それぞれの首席指揮者に大変魅力的な人材～多分東京のことを言っているんですよね～確かにベルリン・フィルも振っているパーヴォ・ヤルヴィもいれば、ジョナサン・ノットもいるし、大野さんもいるしということで、これは私たちにとっても脅威ですと。だから、絶えず高いモチベーションを持って水準向上に努めなければなりません」と。

私も古だぬきになりましたから、過去30年ぐらいベルリン・フィルの来日会見は断続的に出ていますが、日本のオーケストラを意識した発言がトップから出たのは初めてだったんですね。非常にインパクトがあつて、今やそういうふうに見られているということですね、十分グローバルスタンダードという発想はやっぱりどこかでは持たないといけないんですよね。その辺がせつかくオリパラの年に発表するものなので、入っていてもいいのかなと思いますよね。

だから、十分相手から意識される存在になってきている。昔、多分最初に来た場合、日本にもオーケストラはあるのかとか、僕がドイツに引っ越したときに、日本人もパンを食べるのかと言われたのと同じような話なので、それが意識されるようになったというのは

大したものだなと思って。そういう、だから晴れがましいというか、自覚もどこかに入っているといいのかなと思います。余り否定的に地べたを這いつくばりますという感じだけじゃなくてね。

【吉本副座長】 ありがとうございます。

ほかにはいかがですか。

【中根委員】 さっき言おうとっていて、一つ忘れたんですけど、まさに近藤理事長から、この懇談会を発足したときに考えていたことというご発言があって、要するに音楽、特にクラシック音楽が今のこの社会、現代において持つ意味が重要で、そういうのをどんどんこれからも発展させていきたいというご発言がありました。

そういうことを、この「はじめに」というところにつけ加えて、他方で、今、池田さんがおっしゃったように、日本のオーケストラ全体が、もはやそういうグローバルスタンダードになっていること、にもかかわらず、特に若者のクラシック音楽離れが進んでいる。こういう状況を踏まえて何をしたらいいのか。特に都響が何をしていくべきかというようなことを、最初の「はじめに」というところにもってくると、すわりがよくなるのかなという気がいたします。

【吉本副座長】 ありがとうございます。

はじめのところに課題意識をもう少し書き込むというようなことですよ。ありがとうございます。

【池田委員】 何かザルツブルク音楽祭の企画部門のトップ、総監督という立場で、自分も大変すぐれたピアニストのマルクス・ヒンターホイザーに11月4日に都内で会っている話していたんですけど、クラシック音楽の危機という題名のパネルディスカッションとか、セミナーに世界中から呼ばれるんだと。でも、一度も危機と自分は危機を肯定したことはない、提供の仕方が悪いだけだと、頭を使えと、そう言って回っていると。だから、危機なんか自分は感じたことがないとはっきり言っていたので、やっぱり多少、せっかく提言なんだから、やや大風呂敷というか、ポジティブシンキングの旗がひらひら見えたほうがいいのかと、さっきのグローバルスタンダードも含めてね。十分、だからツールとしての性能、プロフィールは備えているので、じゃあ、それをどう転がしていくかというような話ですよ。

だから、途中で出た意見はうんと縮めて、提言を前面に目立たせて、その提言に対して言いわけパートというか、今はこういうことをやっていますというのを後半に付記する。

【堤座長】 先ほどグローバルスタンダードになってきた、確かにそのとおりだと思いますし、ということは、やはりお客様が減っているとか、それもドイツの大新聞の方も非常にやっぱり心配していて、ですから、何をその方々が言いたいかという、やっぱりドイツはドイツ、日本は日本、フランスはフランス、アメリカはアメリカじゃなくて、やっぱり皆さんでそういう大きな問題は手を携えてやっていきたいというのが、その方々のご意見だったわけですね。

やはり、もし都響がベルリン・フィルの総監督が言うてくださるように、本当の意味でのグローバルスタンダードであるんであったら、逆にそれはそれなりの責任も生まれてくるわけです。ただ日本に来てすばらしい演奏をするだけじゃなくて、東京には都響というすばらしいオーケストラがあると。それだけ重要視して見られているんだしたら、やっぱり都響としてもそれなりの責任もございますし、ということは逆に、もちろんいろんな細かい改善していかなきゃならない、もっとやっていかなきゃならない点はたくさんあると思いますけども、私たちは今までに世界にないものもつくっていく。ですから、今、ある意味で逆にリーダーシップをつくっていくいいチャンスなんじゃないかと思うんですね。日本の東京にはこういうものがあるんだと。日本の音楽界もすばらしい。じゃあ、せっかく向こうがこれだけの認識を持ってくださるんですから、逆にそれを使っていかなきゃ、使わない手はないと思うんですね。

ですから、いろんな意味でのポジティブシンキングというんですか。それが、やはり僕はすごくこれから大事になって、逆に大事になってきて、我々がこの提言なり何でもすることによって、もし東京だけじゃなく、日本だけじゃなく、それが世界に通用するものであれば、それは私はこの懇談会の一番の収穫になるんじゃないかなという気がしております。

【吉本副座長】 ありがとうございます。

今の堤座長のお話は、国際的な視点で見たときに、都響がオーケストラ音楽の振興ということに果たす大きな責任もあるし、むしろリーダーシップを持って積極的にやっていこうという、ある意味自覚と責任みたいな話だったかと思います。確かにそういう部分は今入っていないので、頭のところに入ってもいいかもしれないですね。

【池田委員】 「はじめに」・・・のところが一番に入っていたら。

やっぱりさっき、午前中は音楽の友で2時間日本のオーケストラについての座談会をしてきたんだけど、今の若い世代の聴衆は、値段の違いはあるにしても、あんまり日本のオ

ケ、外国のオケって考えないで、聴きたい興味のある曲だったら来るみたいなどころがあって、それは諸刃の剣で、逆に1回券ばかり売れて定期会員になかなかなくてくれないというリスクは伴うにしても、我々が子供のころ、親たちがやっぱりベルリン・フィル、ウィーン・フィルは最高だよとか、日本のオケって聴けないとか言っていた時代とは全く状況が一変して、オーケストラが好きな人は両方普通に行くようになっているので、その辺はもう全然やっぱり国際的な土俵に乗ったし、逆に日本に来ないドイツのオケとかフランスのオケってあるわけですよ。とか、向こうでたまたま中ぐらいの都市の歌劇場に行ったときのピットから聴こえてくる音ってね、もう本当日本のオケって上手だなと思うぐらいものすごいひどい音がしていますよね。

だから、置かれている立場としては十分にグローバルスタンダードに乗っているのに、その土地だけ見ていていいのかって今の堤先生がおっしゃったようなことは、どこかでやっぱり押さえておいたほうがいいと思います。

【吉本副座長】 項目立てて提言をする前に、何か最初にメッセージのようなものがあるといいかもしれないですね。

【池田委員】 そう、そこはやたら元気なほうがいいと思います。

【吉本副座長】 このはじめにというのは懇談会の位置づけとかですので、これとは別に何かキーメッセージのようなものが最初にあったほうがいいかもしれないですね。

【近藤理事長】 そういう意味では提言5の都響ブランドとビジョン、これが頭に来てもいいのかなと思います。大きな社会の流れの中で都響を位置づけて、まずそこで都響がもつべきブランドビジョンを示す。ここまで来た都響の力をさらに発揮し、いろいろなチャレンジに立ち向かっていくにはどういうビジョンを持つべきかを提示し、その上で個別の項目にいくというほうが何となくいいのかもしれないですね。

こちらは提言を受けるほうなので、以上がこういうものを受けたいという、いわば注文です。

【吉本副座長】 この提言、今5に入っている部分が頭に来たほうがいいかなというのは私も思ったんですけど、でも、これはビジョンを考えるべきという話で、ビジョンそのものは書いていないんですね。そもそも都響のビジョンをまとめるほどここでは議論が出てきていないので、今は5番目に来てしまっているんですね。

【近藤理事長】 ここまで来たのであれば、ビジョンを前に出すのが自然では。

【吉本副座長】 もう一回しっかり出すべきだという提言になっているので。

【近藤理事長】 それが一つの大きな提言として最初に来てもいいのでは。

【吉本副座長】 わかりました。

ほかにはいかがですか。

澤委員、いかがですか。

【澤委員】 おっしゃるように都響のレベルは間違いなく国際的なところでも相当高いところにいると思うので、それをいかに日本国内も含めて発信するかということだと思っと思うんですけど、あと、都響の成り立ちからだとは思いますが、国内でも東京都の外に出る機会というのは、まだまだ少ないのかなと思うので、その辺、もっと国内での認知度を高めていければ、それは提言の中にも書かれているとは思いますがね。

提言のまとめ方については、さっき住吉さんが言われたみたいに、現状があって、それに対してこちらの提言という形にしたほうがと私も思いました。

【吉本副座長】 ありがとうございます。

湯浅さん、お願いします。

【湯浅委員】 どうしても説得力があったほうがいいと思うんですよね。

今、皆さんがおっしゃったもっとポジティブにというのは全くそのとおりですし、もしかしたらやっぱりビジョンが、きちんとした新しいビジョンをつくっていくんだというのが、次の中期経営計画をつくる時期に一番いいとは思いますが、28年と29年の報告書を見ているんですけれども、結局ここ、どうしてもやっぱり多分一番今の課題はデータがないとか、現状分析がやっぱりすごく難しい。エビデンスがないので、どうしてもふわっとしちゃうなと思うんです。

これだけ見ると、来場者数が28年と29年度で4,000人ぐらいふえているんですよ。

あと、音教というか、音楽鑑賞教室のほうも、結構数千人の規模でふえているんじゃないですか。4,000人ぐらいふえていると。これってやっぱりすごいことなんだと思うんですね。なのに、あえてコミュニティをもっとつながりましょうというふうに言うには、それはなぜなのかという課題意識として、やっぱりでも、定期演奏会もふえているんですよ。ふえているけれども、その観客の年齢層が圧倒的に高いのか、それとも定期会員がふえていないとか、その将来に対する何か課題があるんじゃないかと思うんですね。

だから、本当はこれだけを見るとすごい成長しているように見えるし、事業収入も伸びているし、広告収入も伸びているという、この28、29年は。それはいいこともあるん

だと思っけれども、あえて今これをやる、もしかしたら事務局の皆さんの課題意識とか、何かそういうのはもうちょっとあって、それに沿うといいのかなという。もしかしたら、もうやっていますよという話で済んじゃうんだったら、何かだなと思うんですけど。

でも、きっとこれまでの議論としては、やっぱりまだいけない、到達していないオーディエンスがいるんじゃないかとかということですよ、きっと。いうことだと思うので、何となくその辺が染み出ると、より具体性ができるのかなとちょっと思いました。

【池田委員】 定量的に語るのが難しい分野なので、そうそう、きのうも天国と地獄って、フレンチカンカンのオペレッタ、日生劇場で二期会とニッセイ文化振興財団の共催でしたけど、全然期待しないで行ったんだけど、すごくよかったんですね。

それで、今の若い日本の歌手たちは歌って踊れるし、日本語もしっかりしているし、これ、同じ小屋でやっている劇団四季のお客さんが見ても十分楽しめるのに、劇団四季は1カ月とか1年できるものが、何で二期会は4日で終わっちゃうのかなと。それも親類縁者に切符を押し込んで。

だから、そういうのはこの仕事、最初に原稿料をもらってからで、もう四十何年たっていますけど、ずっと考えて解決の糸口の見えない長いトンネルをずっと歩いているような気がしてならないんですね。そこの壁はどうやってできているんだろうとかね。

だから、都響にだけ押しつけていい問題と、そうじゃない問題とはきっちり分けて考えたほうがいいと思いますよ。

日本のオーケストラ界って、さらに言えば、PAを使わない生音のクラシック音楽をやっている業界と、そうじゃない業界全体の問題なのかというのかね。都響だけ集中砲火をここにいるメンバーが浴びせても、解決のつかないもっと大きい見えざる敵というか課題があるから、そこはジェネラルな話なのか、都響は個別の話なのかというのは、割と慎重に峻別して書かないといけない問題かとは思いますが。

【吉本副座長】 さっき湯浅さんから出た発言で、課題は何なのかと。音楽鑑賞教室も伸びているし、それから入場者数も伸びているしというのがあったんですけど、事務局として都響の課題、今、直面する課題はこれですというのがあるとしたら何になりますか。

もちろん財政的なこととかね、あるいは本拠地ホールのこととか、そういうのはあるんだと思うんですけど、プログラムということでいくと。

【国塩芸術主幹】 それぞれあると思います。

【小野事務局長】 私は4月に来ているいろいろ見えていますけども、やはり一番中で多いのは、

こんなにうまいのに何でこんなに知名度が低いんだということは方々から言われています。それをどうするかというのが一番の課題かなというふうに感じていますけれども。

【国塩芸術主幹】 そのとおりです。50年以上もやっているオーケストラなのに、ずっとそれが課題で、たとえば若杉さんが音楽監督時代、大変な話題になって、都響こそがナンバーワンだと言われ、人気の高いオーケストラになりましたが、今なお、メディアを持っているN響とか読響のほうが一般的な知名度がありますよね。

音楽鑑賞教室も長年数多く行っていますが、子供たちにしてみれば、それが都響なのか、東響なのか、東フィルなのか、司会者が楽団名を紹介しても、結局は黒い服を着て演奏しているお姉さんとお兄さんがいるという見た目が変わらないので、あのときに聴いたオーケストラはどの楽団だと記憶している子は限られ、次に別のオーケストラを聴いたとき、この前も聞いた、と思うのがおそらくほとんどでしょう。名前も似ているし。

かといって、例えば音楽教室のときに、アナウンスはしても都響という看板をかけられるわけでもない。また例えば、子供たちに何かステッカーの1枚でもお土産で配ったらと思っても、だめなんですよ。営利目的になってしまうから。そういうことを乗り越えて知名度をアップしていかなくちゃいけない。最近は動画チャンネルを使って都響の演奏を積極的に紹介してもいますが、広がりはまだまだです。それから地方公演も行っていますが、大都市での公演は多くは自主公演なんです。各地のホールに都響を買ってもらえるところまでなかなかいかない。もっと営業努力は必要ですが、今どのホールも予算がない。そんな中、東京のオーケストラよりも、ヨーロッパの中小規模のオーケストラのほうが断然経費が安い場合があり、あまりクラシック音楽に詳しくないホール担当者だと、それなら海外のオーケストラをと思うのは仕方ありません。

だから、知名度をアップするというのは非常に大きな課題。例えばタクシーの運転手さんに東京文化会館に行くと言ったら都響の演奏会かと聞かれるとか、そういうところまでいきたいし、自分はオーケストラなんか知らないけど、街にオーケストラぐらいあってもいいんじゃないかというふうな世論が形成されていかないと、これはなかなか難しい。職業としてのオーケストラを想像できない人もまだまだいます。オーケストラや芸術音楽に対する認識が何十年たっても育っていない。日本のオーケストラはうまくなっているのに、テレビなどのクラシックの番組はすっかり減りました。これはもう我々自身がメディアを持ったり、限られたお金を使って知恵を絞るしかないのですが、そういったことを専門に考える人がなかなかいないというも含めて、難しい課題に今我々は直面していると思いま

す。

それから、もう一つ、日本でどんなにいい演奏をしても、海外に英語で伝わらないという現実が大きいと私は感じています。海外の音楽関係者たちは、日本は大事なマーケットだとおっしゃるんですけども、極端に言えば、若い指揮者が日本のオケを振って成功しようが失敗しようが、キャリアには大して影響がないんですよ。英語で批評が出ないものだから、日本でどんな演奏会が行われているかということが海外ではほとんどわかりません。日本のオーケストラの演奏会レポートが英語でもっと発信されていくようになってくると、少し変わってくるんじゃないかなと。インターネットでは、バッハトラックなど音楽専門のウェブサイトが出てきていますが、まだまだ都響や読響がこんな演奏をしたという情報がヨーロッパで話題になるような状況がない、つまり伝わっていません。知られないことイコールやっていないも同然と言う状況が一番の問題で、取り組むべき課題と思っています。

【池田委員】 東京都に生まれ育った人間としては、N響や読響は全国区だけど、東京都は自分たちの街のオケだという意識が僕、高校生のころに生まれて初めて定期会員になったのはこのオケで、そのころは何かもうちょっと世の中のんびりしていたんで、割とすんなりそういうふうに最初に会員になったんですけど、今、情報があふれちゃっているのと、難しいよな、やっぱり。

でも、やっぱりケント・ナガノなんかが言うのは、オーケストラというのは社会のメタファーだから、やっぱり存在している場所のいろんな文化のぐあいを映す鏡であり、指揮者と楽員のコミュニケーションと小社会が大社会に対して何を発信していくかという点で、やっぱり地理的条件に非常に規定される文化機関であるわけですから、だから、この10年、15年で都響が一番知名度を上げたのって、石原慎太郎元都知事が潰すの何のって騒いだときで、あのときはすごいみんな注目してくれたんだけど、損して得取れじゃないけど、あのときの騒ぎを知名度の向上に上げられなかったのは残念だったなとは思っています。

【後藤委員】 この間の野音のときも、日比谷公園の入り口に、のぼりは何かオリンピック気運醸成何とかってあったけど、一つも都響って、やっぱりそれもいけなかったんですか。どこにも入り口、どこにも都響って書いていなくて、私、野音に行ったことがなかったの、何か東京、東京だか、2020だか。

【池田委員】 JAPAN2020。

【後藤委員】 気運醸成イベントとかいうのぼりはあったんですけど、どこを見ても都響

と書いてない。

【小川GM】 音楽祭のポスターのところの一番上に都響のロゴが載っているというぐらいだったかもしれないです。

【後藤委員】 何かそれはちょっと。いや、私、逆に何かまたオリンピックのイベントだから、何かまたしちゃいけないのかなって思ったりとかしたんですけど。

【国塩芸術主幹】 そうですね。あってもいいかもしれない。だけど、それをやらなかったからよかったのか、悪かったのかの議論まで行ってないという。ただ、なかったというだけなんで、それを次やるときにはまたやればいいですけど。

【後藤委員】 それは私がただ単にそう思ったという。

【国塩芸術主幹】 あっていいと思いますね。それでみんなが写真を撮れば、それが写り込むわけですから。

【池田委員】 ちょっとね、控え目。

先週、そういえばベルリン・フィルの三つ目の記者会見にも後藤さんと一緒に、それはここの東京文化会館の中であって、例の鈴木幸一さんの「東京・春・音楽祭」の特別バージョンで、6月にベルリン・フィルが今度はドゥダメルの指揮で来て、オリンピック協賛のいろんなのをやって、世界から集まった280人の合唱団、新宿御苑で第九をやるんです。1万人無料招待でね、雨が降ったらかっぱを着てもらいますという、そんな話で。

でも、これもI I J鈴木さんのプライベートフェアだから、公的資金を使うものじゃないから何をやっても勝手とはいえ、東京オリンピック・パラリンピックの文化イベントの公式参加行事が、日本のオケじゃなくてベルリン・フィルというのがね。これでイタリアの合唱団が来たら、また日独伊の再現ができるかなと思ったけど、日本のオーケストラはもっとこれを怒っていいんじゃないかとね。いや、そんな時期忙しいから嫌だというのが本音なのかもしれないけど、何で東京のオリンピック・パラリンピックの一番派手なオーケストラの行事が、半年前に来たばかりのベルリン・フィルかというのは、ちょっと何か一瞬の違和感を、プログラム自体は十分に魅力的で有料公演も無料公演も完全に瞬間蒸発するでしょうけど、何かちょっとさっき言ったグローバルスタンダードというのは向こうは見ているのにこっちの側にそういう思いがなくて、これをいきなり持ってくるというのは何かちょっと、日本のオーケストラは日本人に甘く見られているんだなと思って、何となく居心地のいい記者会見じゃなかったですね。

【後藤委員】 でも、実質的に、私、ちょっとよく知らないのであれですけど、共催イベ

ントといっても結局冠だけで、オリンピック側からお金が出ているとは思えないので。

【池田委員】 全然。全く、だから鈴木さんの個人フェアだから、何をいちゃもんつけるでもないんだけど、何かちょっと寂しいなと思って。

【後藤委員】 もちろん、もちろん、それは前回そういう話、前々回からしましたけれども。

【住吉委員】 すみません。ちなみになぜシールを配ってはいけないんですか。

【後藤委員】 そうそう、私もそう思います。

【吉本副座長】 そうそう、音楽教室では都響と言っちゃいけないんですか。

【国塩芸術主幹】 いいんです、いいんです。言っているんですけど、何か配りものをしたりなんていうのはだめというふうに言われているんです。

【住吉委員】 それは教育委員会なんですか。

【国塩芸術主幹】 はい。でも、それは私たちも理解しているので。

【池田委員】 服装の規程ってあるんですか、オーケストラの楽員の。

【国塩芸術主幹】 服装は普通に。

【池田委員】 都響のTシャツを全員着て演奏して。

【国塩芸術主幹】 私もそれでいいと思うし、たとえば夏は暑いから軽装でやれないか検討したりもしますが、先生なり親御さんからはちゃんとした格好をして演奏しているところを子供たちに見せたいとか、楽員の中にもやっぱり上着は着たいという意見があったりしてなかなか難しい。

さきほどの話に戻りますが、音楽鑑賞教室に来てくれた子供たちに、今度こういう演奏会があるから来てねとか、おうちに持って帰ってねとチラシなどを配りたいのはやまやまなんですけど、そういうことはやらない、やれないというふうにはずっと来ていますね。今もあえて話題にしないという感じです。先生個人に意見を聞いたらそうでもないかもしれないですけど、全体としてはもうそんなものなのだという日本の空気なのかもしれない。

【池田委員】 それはでも、壊していかないとね。

【国塩芸術主幹】 そうかもしれません。

【池田委員】 MCで宣伝しまくるというのはだめなんですか。

【国塩芸術主幹】 もちろん言っています。オリンピックのことも司会では言っているんですよね。でも、演奏会の宣伝はやはりだめです。せめてバナーとか、どこかに指揮者の近くに都響のロゴマークを飾るぐらいできないのかなというふうには思っているのですが、

なんだか難しい。できることから少しずつやっていくようにしないとイケませんね。

【後藤委員】 Tシャツ案いいと思いますよ。

【池田委員】 一目で都響とわかるよね。

【吉本副座長】 知名度を上げるということになると、やっぱりそこはプロの人に入ってもらわないと。

【後藤委員】 ブランディングですか。

【吉本副座長】 CIなのか、ブランディングなのか。あとは技術的な部分もきっといろいろありますよね。

【国塩芸術主幹】 そうです、そうです。それはまさにそうなんです。

【後藤委員】 お金はかかりますけどね。

【吉本副座長】 音楽鑑賞教室で都響ですと言えないと、初めて聞いてびっくりしたんですけど。

【国塩芸術主幹】 いえ、それはもちろん言えるんです。音楽鑑賞教室では何かものを配ったりしちゃいけないということです。音楽鑑賞教室でも、無料招待のプレミアムコンサートでも、司会者が、都響は前回の東京オリンピックを記念してできたと紹介します。そうすると皆「おお！」とか言うんですけど、それがその次につながるかどうか。これは楽員の皆さんからも常に言われていることなのですが、音楽鑑賞教室に来た子供たちが次につながる場所がないんじゃないかという課題です。だから、都響を正しく認識してもらって、なおかつ次につなげるために、今度、君たちも楽しめるような、こんなコンサートをやるんだよというふうにチラシの1枚でも手元に挟めればいいんですけど、それはまた別という話になってしまいます。

【後藤委員】 そこ、またデータがないんですよね、結局。何をやっても、いろんなアウトリーチをやって、本当にそれが定期演奏会があるとき、その人たちが来ているかどうか、結局、いや、世界的にですけど、LSOなんかでもそういう。

【池田委員】 でも、やっぱり僕の子供のころって、小学校でロッテが新しいチョコレートを出したら、杉並区立の公立の小学校でしたけど、試供品を教室で配ったりしていたの。今、それをやったら完全にアウトなんですよ。

NHKは逆に民間企業の名前とか一切言わなかったのに、最近ばんばん言っているし、非常にだから全体を統括する基準が曖昧な社会の中で、オーケストラにちょっとしわ寄せがきているという気がします。

それからC Iに関しては、前島海理事長のときに佐藤可士和さんを入れたあのロゴマークとか、全部やりましたよね。それで、何か皆さんの肩書も全部英語になっちゃったんだよね、一時ね。

【吉本副座長】 それは都響もそういうことをやられたんですか。

【池田委員】 佐藤可士和を使ってやったんですよ。

【吉本副座長】 このロゴは佐藤可士和さん。

【池田委員】 そう。ちゃんと記者発表もやって、だから、音楽監督じゃなくてミュージック何とか何とかとか、チーフプレスオフィサーとか、さすが商社マンだった理事長だから、全部、それを片仮名で名刺で書くとめちゃくちゃ長い。こっちも記事にするときにやたら文字数がかかるんで嫌でしょうがなかったんだけど、これは近藤理事長になって日本のタイトルにだんだん戻ってきたからほっとしているんですけど、一応そういう国際志向でC Iめいたことをやった時期はある。

【湯浅委員】 都響が学校に行ったときにチケットとかチラシを配れない件なんですけど、つい最近L S Oの教育担当者とプロジェクトをしていて話をしたときに、L S Oのディスクバリーはオーディエンスを獲得する手段ではないというふうにはっきり言っているんですね。やっぱりそこは、オーケストラとしての全ての人は音楽に触れる権利があるんだということと、より教育的、社会的価値に重きを置いたプロジェクトだというふうに言っているんで、ちょっとここの提言のほうに戻ったときの中でも、2番のところが多分教育にかかわるところだと思うんですけども、将来の客獲得につなげるための教育プログラムですというふうにはちょっと言ってしまうのも、個人的にはすごく違和感があるんですよね。

でも、今度それを広報とか、ブランディングとか、認知度を上げるときには、多分こういったことをして地域に貢献するオーケストラなんですというストーリーを言うことによって、そのストーリーを伝える。

恐らくその認知度がないというところに、やっぱり専門家や戦略性だと思うんですけど、一体誰にどういうふう知ってもらいたくて、その人にどうしてもらいたいのかということとで戦略が違ってくるんだと思うので、そういう視線で戦略性を持っていったほうがいいのかなというのと、音教イコール観客喪失というふうには、ちょっとこの懇談会の意見としても個人的には違和感があるかなと思います。

【吉本副座長】 ありがとうございます。

今の湯浅さんのご意見、すごく重要なところだと思いますね。結果的にそうなることは

あっても、それを目的にしちゃうとやっぱり違うというのはあると思うので。

【池田委員】　あとはヨーロッパと日本の違いで、多分日本のほうが、義務教育における音楽教育というのはまだ萎えていないんですよね。欧米はやっぱり音楽の授業自体がなくなっちゃった国も結構あるので、もっと危機感が強くて、社会全体に子供と音楽の接点を維持しなきゃという危機意識があるけど、日本の場合は幸い義務教育の音楽の授業自体は、多分先進国中では最もきっちり残っているほうなので、その違いはあると思います。

【堤座長】　何かフィンランドに次いで多いなんぐらいです。ハンガリーが愕然と減っちゃって。コダイメソードとか知らない人も出てきているって。

【池田委員】　ドイツももう、統一後激減。

【堤座長】　そうですね。

【近藤理事長】　さっきの件ですが、公の場で商業活動をしてはいけない、営利活動をしてはいけないというルールがありますが。それが学校にも応用されて、教育の場で営利目的のことをやるなということになったのではないのでしょうか。学校でグッズを売ってはいけないという原則が、ちょっと行き過ぎて、自社のロゴや次のプログラムの紹介もやっては、いけないというのは、ちょっと行き過ぎだとは思いますが。それはぎりぎりまでやっていいんだと思う。

【吉本副座長】　だから、広報活動でチケット売るためになると生々しいけど、都響の広報活動、都響をより多くの人に知ってもらう。

【池田委員】　やりようだと思いますよ。

【近藤理事長】　余り萎縮しないで、ぎりぎりまでやってもいいのかなと思いますけどね。

【吉本副座長】　あと、個人的に思ったのは、インフォグラフィックスってあるじゃないですか。例えば子供たちにすごいたくさん提供しているのであれば、そういうデータとかをビジュアルにして、わかりやすく伝えるというのがいろいろあるんですね。だから、都響のパンフレットのようなものも多分あると思うんですけど、都響がどういう存在なのかということを知りやすく伝える印刷物なのか、あるいはネット上の広報なのか、いろいろあると思いますけど、そこは何か工夫の余地があるような気がします。佐藤可士和さんにロゴマークを考えていただくのもいいと思うんですけど、もうちょっと具体的なブランドを、都響としての強みを伝える戦略というのを、もっと具体的に検討してもいいような気はしました。

たしか澤学長がおっしゃっていましたよね。タグラインを都響のロゴにつけたらどうか

と。だから、世界で一番優しいオーケストラ都響とか、頭に1個つけるだけで、とにかく東京と名前がつくオーケストラはいっぱいあるから、それと区別できる方法を考える必要がある。矢部さんなんかもおっしゃっているので、そこはやっぱり何かタグラインで特徴をつけるとか、技術的な話でありますけど、検討の余地があるような気がしました。

【池田委員】 五つある、東京ってついているの。

【吉本副座長】 五つあるんですか。

【池田委員】 東京フィル、東京交響楽団、東京都交響楽団、東京シティ・フィル、東京ニューシティ管弦楽団。

【後藤委員】 しかも英語にすると、N響も最後につけないですか、たしか。

【池田委員】 そうそうNHK Symphony。

【後藤委員】 「, Tokyo」とかつけていますよね、外に行くときは。

【近藤理事長】 ロンドンやウイーンにもオケは複数ありますよね。

【後藤委員】 でも、三つとかです。それでも。

ベルリンがちょっと多いですか。四つ、ベルリンという名前がついているのが四つぐらい。

【池田委員】 二つの街が一つになったからね、あそこはね。

でも、あそこも、でも、四つのオーケストラと二つの合唱団と一つのバレエ団かな。管理部門は共通のGmbH（ゲーエムベーハー＝有限会社）をつくって一つにして、演奏、実演部門だけを別団体にして組織運営の効率化を図ったりはしているので、東京よりは進んだビジネスモデルです。

【吉本副座長】 ありがとうございます。

時間が残り少なくなってきました。きょういろいろ貴重なご意見をいただきましたが、私一人で全部入れてまとめていくのはちょっと大変なので、事務局とも相談しながら、堤座長のご意見も伺いながら、次回に案という形でお示しをして、そこでもう一回ご意見をいただいて、修正して、最終をまとめるような手順で進めさせていただけたらと思います。

きょう皆さんの手元に届いていなかった方がいらっしゃるということを、私は知らなかったんですけど、きょうの懇談会で発言できなかったことで追加でお気づきの点があれば、事務局にご連絡いただければ、それを私のほうでまた受け取って、修正に反映したいと思います。

では、この後は堤座長にお戻ししますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【堤座長】 どうもありがとうございました。

それでは、本日のご意見を踏まえまして、報告書の作成等を進めまして、第7回の懇談会で報告書（案）となると思いますが、ご提示したいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、近藤理事長、きょうの議論をお聞きいただいて、何か一言いただけますでしょうか。

【近藤理事長】 ありがとうございました。

まず、吉本さん、本当に大変に貴重な時間と気を使っていただいて、大変いい提案ができています。是非、きょうの委員の方々のご意見を反映させて、インパクトのある、わかりやすく、メディアが書きたくなるような、しかし、本当に誠実な中身のあるもの、大局感に基づいたものをつくっていただければ有難く思います。

先ほど課題というか、やりたいということは何かという議論の中で、知名度の低さというか、認識のギャップの問題が国塩から出ましたけど、そのためにでも私はやっぱり海外公演を毎年やりたい。せいぜい2年に1回やりたいです。

もう一つは、専用ホールというか、それに近いもの、この効用は非常に明確です。大変だけれども、この二つはここに掲げられたいろいろな課題を解決する上で、一つの大きな中心的な力になる、エネルギーになるんじゃないかと思います。海外公演の定期化と専用ホール、あるいは本当にそれに近いものをつくるというのが、前面に出てくると、すぐに解決はしないかもしれないけども、それに向けて我々も目標ができるのかなという感じを個人的にはしております。それと、知名度の問題ですね。

その三つが大きな課題です。これらは素人的に見ても、社会からもわかってもらえるもので、子供たちの教育とか、身障者へのサービスとか、それらは誰もがやっていることで、それをどれだけ増やせというのか。今、100やっていることを120やらなきゃいけないのかというと、それはただ多いほうがいいというだけに過ぎないので、そういう類のものと、明確な中長期的な指針的なもの、先ほど申し上げた三つぐらいですかね。それらを区別してメリハリをつけた方が、住吉さんがおっしゃったように、あれもこれも、という結果にならずに済むのではないのでしょうか。レポートが出てきた時、レポートに何が書いてあったか聞かれて、うん、いろいろありましたねとってぱっとファイルして終わっちゃう。それじゃあインパクトが全くないわけですから、今申し上げたようなちょっとした

工夫をしていただけると、私が本来期待していたものに十分にマッチするものになるかなと思います。吉本さんにプレッシャーをかけていたら申しわけないです。いつでも、必要であれば、非公式にご相談に乗りますので。ありがとうございました。

本当に皆様、あと1回しかないとなると、これまで6回でしたかね、ありがとうございました。なるほどそうだったんだというような、毎回毎回目からうろこというか、様々な有益なお話を伺うことができまして、私が一番勉強になっているのではないかなと思っております。

どうぞ、これからもよろしく願いいたします。

【堤座長】 どうもありがとうございました。

本日は委員の皆様方からさまざまなご意見をいただき、本当にありがとうございました。

大変貴重なご意見、ご議論をいただきましたが、残念ながら本日は閉会の時間となってしまいました。

事務局からその他ということで、何かありましたらお願いいたします。

【小野事務局長】 ありがとうございました。

次回、最終回になりますが、第7回の懇談会、こちらは年明け、2020年1月29日、水曜日、午後2時から、こちらの場所、東京文化会館の中会議室2で開催の予定でございます。開催のご案内、改めてさせていただきますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

以上でございます。

【堤座長】 それでは、第6回東京都交響楽団の将来像に関する有識者懇談会を終了したいと思います。

長時間にわたりご協力いただきまして、どうもありがとうございました。